



TITLE:

(随想)開業医の雑感

AUTHOR(S):

藤田, 幸雄

CITATION:

藤田, 幸雄. (随想)開業医の雑感. 泌尿器科紀要 1963, 9(5): 227-228

ISSUE DATE:

1963-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112434>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 9 卷 第 5 号

昭和 38 年 5 月

随 想

開 業 医 の 雑 感

福 井 市 藤 田 幸 雄

思いの浮ぶまま 2, 3 の事柄に就いてペンを執るが、月日の立つのは早いもので、金大皮膚科泌尿器科教室を辞して生れ故郷のこの福井に根を落してから満 7 年 10 カ月になる。

大病院では一つの大きな組織をバックとして各科に患者が集り、各々の専門科の診療を受けるシステムになつていたので比較的各専門科別に成り立つが、地方都市における泌尿器科開業は大病院に務めておる先生方が考えておられる程容易ではない。と申す理由は泌尿器科疾患は他科に較べて少いが、専門医も少いので各人の患者配分数は他科に比して決して少いとは云い得ないが、地方では手術は外科とするものであると云う思想が残っており、一方泌尿器科は性病科の毛の生えた程度に思っている者がいるので、当然我々の科で診療すべき患者が他科で治療を受けていることが多い。従つて泌尿器科医の患者配分数が少くなる。例へば尿管結石で腹痛がおこると先づ内科へ、結石と分つて手術となると外科へと、又婦人の膀胱炎は婦人科へと云う様に。この問題を解決するには患者への啓蒙と同時に内科、外科の先生方への PR と協定が必要である。要するに我々も内科、外科の患者を診ないことである。自分の専門分野でない疾患を取扱わないことは専門医の威厳を保つ上にも、又内科的疾患を診たために内科医としては常識的のことが分らず、つまらぬ失敗をして、いくら専門分野で名声を挙げても差引かれて専門的知識まで云々されることがあるので、特に此点に気をつける必要がある。

我々第一線病院で診療する主なる疾患は、腎盂炎、膀胱炎、女子尿道膀胱炎、非淋菌性尿道炎、結石症特に尿管結石、前立腺腫瘍主に肥大症、尿道外傷、狭窄、陰囊水腫、包茎、小児の夜尿症、頻尿症等が大部分であるから、将来開業なさる先生方は上記の診断、治療が充分できる様に計画されるのがよいと思う。

その他遭遇する疾患としては、乏尿、浮腫があり、腎臓が悪いと云われたので腎臓の専門家に診てもらいたいと来院する腎炎並びにネフローゼ、高血圧による腎硬化症もかなり多いので、腎臓学会も既に数年前より発足していることでもあり、大都会の方は別として、20 万～30 万位の都市での開業医は此方面の知識も充分取入れておく必要がある。又境界領域の鑑別として、右腎部痛の時には肝炎、胆石症、胆嚢症を、右尿管結石の場合には虫垂炎、外妊を、子宮疾患による膀胱症状等に注意を払うことが大切である。

個人開業医は一般官公立病院と異つて何等外部からの補助金等の資金援助はないし、又官公立病院は所得税を納入しなくてもよいが、我々開業医は一般商人と同額（但し売上げの 28% が所得である云う大蔵省の臨時処置があり多少有利ではあるが）に納税しなければならず、経営はより困難である。そこで薬品、衛生材料、水道料、電気料、電話、設備及び備品、消耗費、病院維持の雑費等はどうしようもないことで、支出金額の率から云つても、又節約できる可能性から考えても人件費が最も大きな問題点となる。所が保険診療

費は常識ばなれした相変らずの低水準であり、他方物価の値上りと共に職員の給料は当然昇給させねばならず、又一方労務管理の叫ばれている今日、8時間労働、週休制は実施しなければならず、その結果職員の増員にせまれ、人件費の支出が益々多くなってくる。そこで人件費の節約とは院長が効率のよい診療方針を立てて能率よく診療を進めることと、職員を訓練して無駄なく、手落なく診察、治療を終了するにあると思う。例へば一例をあげてみると、今ここに初診患者と再来患者5人がきておるとすると、先づ初めに血尿を主訴として来た尿管結石らしい初診患者を診て、早速レントゲン撮影(当院にては76%ウログラフィン静注後10分で腎盂と上部尿管を撮り、次いで更に5分してバンドをはづして直ちに下部尿管と同時に膀胱撮影を行つている)に廻す。そしてこの患者のレ線写真ができ上る迄の間に再来患者の診療をすませておき、レ線写真が現像されてきたら、その所見により即ち結石像が明らかであれば保存的にするか、手術を要するかを決め、結石像のはつきりしない時の尿管カテーテルを行い診断を決定する。要するに医師が一方で患者をみている間に他の患者は医師が直接手を下さなくてよい検査をすませておくことである。この様にすることにより、全く無駄な時間を空費することなく、医師も看護婦も full に、smooth に仕事を運んでいく。従つて職員の労働効率がよくなり、より少い人数で同じ仕事量を終了することができ、人件費が少くてすむことになる。更に大切なことは同じ意味の目的のため二重手間を浪費しないことである。例へば初診時に膀胱鏡をしておるにも拘らず数日後入院してきたら再び膀胱鏡を行う様なことで、術後とか云う様に明らかに目的が違うのなら勿論施行すべきことであるが、同じことを二度行うことはそれだけ医師の体力を消耗させることで、最も開業医として注意すべきことである。我々開業医は身代りがないので何れともあれ健康であると言うことが第一の条件で、もしかかる浪費が度重つて疲労し遂に病床にでもついたらそれこそ一大事である。かかるまでにならなくても疲れてくると数多い患者を365日さばかねばならない身として誤診の原因の一つにもなり、名声を落す一因にもなりかねない。

又外来患者に対してどうしても膀胱鏡をしなければ診断がつかない時は必らず施行すべきであるが、検査のための不必要な検査はしてはいけない。特に逆行性腎盂撮影は外来にてはひかえるべきである。と申すのは遠方の患者に逆行性腎盂撮影をして帰した所、夜おそく高度の腎痛がおこり電話で往診を依頼された場合、いかに疲れておつても自分が行つた以上医師の立場から何がなんでも行かねばならず、疲れを重ねることになる。往かなければ社会的に批判され悪名を残すことになる。何れにしても不利なことになるので逆行性腎盂撮影は原則として入院の上行つた方がよいと思う

又初診時にあまり痛いことをすると入院を希望していた者でも入院しなくなることがあるので念のため。

結局の所大学のクリニックは研究、教育、診療と云う順序に主眼をおくが、我々開業医は一にも二にも患者の診療であつて、原因的な治療があくまでも主体であるけれど、なるべく早く患者の訴えを取除いてやるのが大切である。例へば尿管結石の患者で転げこんで痛がついている時に無理矢理検査をしないで、先づ痛みをとつてからゆつくりとレ線撮影なり、尿管カテーテル等を行う様に気をくばることが肝要である。

開業していても時々興味ある症例に出会ふが、保険事務、医師会、各種団体の役員等の直接診療以外に時間をさかれ仲々論文としてまとめる迄に至らないが、せめて地方会に報告したり、又できるだけ学会にも出席して時代の趨勢におくれな様に務めることは専門医の威厳を保つ上にも、ひいては病院の隆盛を計る意味においても最も主要なる心構えと確信している。更に患者と共に苦しみ、患者と共に喜び合い常に患者の立場になつて考えてやり誠意あるムードをもつことが病院隆盛の一大要因であらう。